

じやりみち

…被災地支援情報…

第108号 発行日 2016.7.20
被災地 NGO 協働センター
〒652-0801 神戸市兵庫区中道通2-1-10
TEL:078-574-0701 FAX:078-574-0702
HP:<http://ngo-kyodo.org/>
Facebook:<https://www.facebook.com/KOBE1.17NGO>
E-mail:info@ngo-kyodo.org
口座番号:01180-6-68556(郵便振替)

2016年度基本方針

もう一つの生き方、もう一つの働き方を考える

阪神・淡路大震災から21年を過ぎ、東日本大震災からも5年を迎えた。その間、様々な災害があり社会情勢も変化した。果たして良い方向に進んでいるのだろうか？東日本大震災の被災地では、復興への課題が山積みとなり先行きが全く見えない状況である。仮設住宅に入居している方々のうち、最長で後5年間も住み続けなければならないという方が2700人に上るということも分かった。外部の支援者は5年を機にさらに撤退の流れが加速している。被災地を見捨てていない、応援を続けているんだというメッセージを送り続けることが必要だ。

また、昨年発生した鬼怒川決壊による水害では、多くの被災者が在宅避難者として苦しんでいるにもかかわらず、十分な物資や食料の支援も行われなかった。避難所の環境は劣悪であり、災害後の1ヶ月間はにおぎり菓子パンのみの生活が続いた。このように多くの災害を経験してもなお、十分にその教訓は活かされていない。

また、災害が起きた直後には、多くの人々が駆けつけ災害ボランティアとして活躍する一方で、緊急期が過ぎるとあっという間にボランティアは去り、復興期には地元の方しか残っていないということもよく見受けられる。これまでの被災地支援を行ってきた経験を踏まえると、外部支援者の知恵やネットワークをうまくつなげ、応急対応期から復興期を見据えて、住民の自立につながる支援を行う必要がある。しかし、現状ではそのような復興期のボランティアはごく少数に限られた団体と、地元に残らざるを得ない団体や個人が踏ん張っているだけだ。

一般的な災害マネジメントサイクルでは、災害発生→応急対応→復旧・復興→予防という流れになっている。ところが、実際には外部のボランティアはほとんど残らず、その結果、災害から地域をどう再生し復興させるのかという議論を誰もすることなく、次の災害への予防だけを考えてしまっていることがある。本来であれば、災害にあった地域をどのように再生し復興するかという議論を、外部者や過去の災害の知恵を参考にしながら行うことが必要だ。自然との付き合い方や災害との向き合い方、被災地の新たな魅力づくりなどをどのように地域に残していくのかということも、本来であれば災害ボランティアの大きな役割の一つであるはずだ。

から10年目の神戸宣言では、「もう一つの生き方を選択する」ということが掲げられた。復興10年の中で、これまでの価値観を転換し、新しい選択をするということが重要であると気がついたのである。中越地震からの復興では、「価値観の軸ずらし」ということが言われた。今までの価値観の軸をずらし、新しい価値観で地域の復興を図っていこうという試みだ。このことも、今までの価値観を疑い、もう一つの生き方を選択するということに他ならないだろう。災害からの復興はまさにもう一つの生き方を模索し選択するという連続の中で成し遂げられるのではないかと。そして、そのもう一つの生き方を作り出すきっかけの一つとしてボランティアがあったのだろう。

もう一つの生き方を選択するということは、もう一つの働き方を選択するということでもある。阪神・淡路大震災から20年KOBE市民とNGOフォーラムでは、多くの若い世代(阪神・淡路大震災を経験していない世代)が参加をしてくれた。フォーラムの中で掲げた10のアクションプランを実現していくためには、こうした若い世代がどのような選択をしていくのかということが非常に重要である。

こうして、もう一つの生き方を模索し、もう一つの働き方を増やし、もう一つの選択肢を選ぶことが、災害からの復興、災害への予防、そして新しい社会を生み出すためにも必要なことではないだろうか。阪神・淡路大震災以降、ボランティアが作り出してきた新しい生き方をさらに模索していきたい。(頼政良太)

2015 年度事業報告

【事業内容】

1. 寺子屋事業

(A) 2015 年度は、阪神・淡路大震災 20 年の検証と東日本大震災の検証の寺子屋を 4 回開催と番外編寺子屋 1 回開催。

阪神・淡路大震災及び東日本大震災広域複合災害の検証阪神・淡路大震災や東日本大震災の検証につながる問題について学びのための寺子屋については、予定通り 3 回開催した。

第 1 回 (5/4) 「5 年目の福島と向き合い 水俣から学ぶ」～考えてつながろう、自然ともつながろう～ 講師：谷洋一さん（アジアと水俣を結ぶ会 事務局長）

第 2 回 (6/22) 「阪神・淡路大震災から 20 年 災害ボランティアのその後」～できることは自分で、できないことは一緒に～ 講師：林大造（神戸大学学生ボランティア支援室）/ 岡本芳子（たつの女性が担う地域防災塾）/ 頼政良太（被災地 NGO 協働センター）

第 3 回 (7/2) 「障がい者について学ぼう」～気軽にボランティアしてみよう～ 講師：風裕之さん・井奥裕之さん（Be すけっと）

第 4 回 (8/31) 「阪神・淡路大震災の取り組みを契機に見えたこと、NPO、NGO に関わって」～「いま」を大切に生きよう～ 講師：市川斉さん（シャンティ国際ボランティア会常務理事）

(B) 上映会については、以下の開催。
7/11 「光りの島 ISLAND OF LIGHT」大重潤一郎監督作品
8/5 「風の島」大重潤一郎監督作品

(C) その他
番外寺子屋
12/22 「大阪 W 選から見て、神戸市政を考える」
講師：林大造さん（しみんマニフェスト大阪 UP）

2. まけないぞう事業
岩手県中心に「まけないぞう」事業を展開。現在の作り手の人数は 53 人となった。5 年目の節目を迎えたものの、仮設住宅での暮らしは今後も数年かかる。歯抜け状態の仮設住宅でコミュニティが崩壊しつつあり、また復興住宅でのコミュニティ形成も難しく、ひきこもってしまうような、不安を抱えた生活を余儀なくされた。これからの 5 年を被災者の方がどう生活をしていくか、私たちがどのようにサポートできるのか？本当に難しい状況に入っている。

そんな中でも、まけないぞうを心の支えにして、生活しながら、まけないぞうを通して、心のケアにつながった。ある作り手さんは、「まけないぞうで貯めたお金は、ずっと手をつけずにとっておいてあるの。もう 30 万円貯めたよ。家を再建した時に記念になるものを買うんだ」と言ってくれた。30 万円ということはすでに 3000 頭も作ったことになる。一方でまけないぞうの支援者からのメッセージを以下に紹介する。

桜ももうすぐ見頃を迎えます。まけないぞうも湯田小卒業生にプレゼントして 20 年過ぎようとしています。卒業生、担任の先生方が、自分たちも何か役に立ちたいと毎年タオルを集めて「送って下さい」と持ってきてくれます。ほんの小さな気持ちがつながって、つながって和になっていくんだなあと改めて思います。小学生の気持ちを送らせて頂きます。お役に立てれば幸いです。（広島県福知山市）

岩手県釜石市の不動寺森脇妙紀さんが「婦人の友」に投稿して頂き、

たくさんのぞうの注文があった。

・実績：11,287 頭出荷（うち子ぞう・親子ぞう・リングぞう、カップルぞうは 3,580 頭）

・回収、作り方講習会（岩手県遠野市、大槌町、釜石市、大船渡市、陸前高田市など）

6/3～6/19、7/23～8/9、11/6～11/13、3/7～3/23、3/12～15（ヒアリング・頼政）

・まけないぞう報告会等

9/25 隣保館（香川）9/26 溝渕さんの地元グループでの講演会（香川）12/8 TPO（タオル仕分け隊）との打ち合わせ

・イベント等での販売

4/26～4/29 高幡不動 / 春の国宝祭り（東京）5/3 わかちあい祭り（京都）5/3 高槻ジャズストリート 2015 7/24～7/28 第 4 回川徳 絆フェア 10/11 美味しい！たかつき。食の文化祭 たかつきジャズとグルメフェア 2015 10/20 全国隣保館館長研修会

3. 災害救援事業

1) 国内災害に関する救援・復興・提言活動

(A) 災害発生時の対応

2015 年度は 9 月に発生した「平成 27 年 9 月関東・東北豪雨」水害により、茨城県常総市にスタッフを派遣し、活動にあたった。当初は常総市社会福祉協議会の災害ボランティアセンターのサポート行いながら、地元の NPO 法人茨城 NPO センター・コモンズを中心に NPO 連絡会議が開かれ、避難所・炊き出し・足湯・法律・行政・片付け・外国人支援など、それぞれの課題を共有し、問題解決に向けて常総市へ提案書を 3 回提出した。同時に 6 者会議として、茨城県・常総市・県社協・市協・地元 NPO・外部支援者などと共有会議を開き、情報の共有を行った。頼政代表は、震災がつなぐ全国ネットワークのメンバーとして他団体との連絡調整を行い、その他のメンバーは災害ボランティアとして、現地での活動を行った。また今後にむけ市民がつくる復興計画づくりへのアドバイスをし、参画もしてきた。また、広島土砂災害から 1 年を迎え、安佐南区緑井で高野山真言宗広島青年教師会有志とともに、同区上組町内会のみなさんと一周忌を開催した。

・茨城県常総市水害派遣

9/12－18、9/28－10/19、10/22－11/5、2/12－19（増島）9/14－18、9/22－10/10、10/13－23、10/27－30、11/6－12、11/19－21、11/30－12/2、12/15－18、1/22－26、2/14－15（頼政）9/12－14（村井）

・広島市土砂災害派遣

6/28～30、8/17～21（増島）8/18～22（頼政）

(B) 東日本大震災支援の継続
まけないぞう事業は引き続き、神戸からのサポート体制を継続した。5 年を迎えた被災地では、いまだ仮設暮らしが余儀なくされている。住宅の格差が生まれ、先の見えない不安も広がってきた。

(C) 復興支援活動
・KOBЕ 足湯隊のサポート

当センターが事務局を努める「KOBЕ 足湯隊」は、主に能登半島(2007 年地震発生)・兵庫県佐用町（2009 年水害発生)・茨城県常総市（2015 年水害発生）など地震や水害の被災地に出かけてきた。能登半島地震の被災地では、毎年継続的にお熊甲祭りに参加。

同足湯ボランティアは、2010 度から神戸学院大学を初めとする「ポーアイ 4 大学連携事業」として、佐用町へ 15 人程度の大学生（神戸大学、神戸女子短期大学、神戸学院大学）が年に 2 回入った。

東日本大震災では、神戸大学東北ボランティアバスのメンバーが被災地での足湯ボランティアを継続して行っている
・ミーティング：5/13、11/16、12/7、1/6、2/9、3/1
・その他

4/26 KOBЕ 足湯隊新入生向け足湯講習会 9/3 神戸大学ボランティアバス打合せ 11/9 神戸学院大学足湯講習 11/22 神戸学院大学足湯ボランティア（佐用町）12/3 神戸大学ボランティアバス総会 12/19 灘地域活動センター足湯（足湯隊）11/18～22 能登奥間兜祭り 1/31 イザ！美カエル大キャラバン

(D) 南海トラフ巨大地震に対して

・たつの女性が担う地域防災塾との協力

2013 年度に引き続き、たつの女性が担う地域防災塾（たつの市）の活動へ参加。同塾生の足湯ボランティア講習会やたつの市内でのまちあるきや災害時図上訓練、クロスロードゲームの講師を務めた。5/17 たつの足湯講習会 7/21 たつのジュニアスクール 12/12 ボランティアセンターのワークショップ 12/20 たつの御津社会福祉協議会での図上訓練 1/30 たつの災害時図上訓練（地震編）3/5 たつの避難所ワークショップ 3/16 たつの災害時図上訓練（地震編）

・お寺防災の継続
アーユス関西が解散したため継続が困難となった。
・高知県黒潮町などとのつながりの継続
高知県黒潮町には訪問することができなかった。2014 年 8 月の水害緊急支援で徳島県海陽町など徳島県関係者とのつながりを深めた。

2) 海外災害に対する緊急救援活動とその後の復興へつなぐ支援活動
当センターは CODE 海外災害援助市民センターの事務局をサポートしながら、震災の経験を伝え、痛みの共感をし、お互いに学び合い、海外の災害救援を通して、支えあいの輪を広げてきた。2014 年度も東日本大震災への支援活動などで多大なご協力をいただいた。また、CODE 海外災害援助市民センターの現地フィールド研修に協力した。

6/13 四川研修 6/15～19 中越・金沢研修 6/27 CODE のタベ 7/2 公益財団法人ひょうごコミュニティ財団ヒアリング（CODE 未来基金）7/12 四川研修報告会 1/14～15、2/25～26、3/10 ファンドレイジング研修 2/12 CODE 寺子屋（講師：松本理事）2/15 CODE 理事会 3/11 CODE 寺子屋（講師：室崎副理事）

4. 提言・ネットワーク事業

(A) 2014 年度に「阪神・淡路大震災から 20 年 KOBЕ 市民と NGO フォーラム 2015」の開催
2015 年 1 月 24 日～31 日に開催した。2015 年度は寺子屋事業でアクションプランの具現化を図った。

(B) 足湯ボランティアからの提言
東京大学被災地支援ネットワークと連携し、震災がつなぐ全国ネットワークの一員として足湯のつぶやき分析から生まれた「足湯のつぶやき」（ボランティアと専門職の連携のためのガイドブック）作成（助成：日本財団）に取り組み 5 月末発刊。こちらのガイドブックの内容には足湯ボランティアからの提言が盛り込まれている。

また、同ネットワークと連携し取り組んでいた足湯ボランティアに関する書籍として『震災被災者と足湯ボランティアー「つぶやき」から自立へと向かうケアの試み』（似田貝香門・村井雅清編著、生活書院、2015・7・20 発行）を発行した。

4/7 つぶやきガイドブックの打合せ

(C) 災害ボランティアハンドブックの作成
関西学院大学災害復興制度研究所の依頼で、製作協力を受託。災害時における若者がボランティアの一步を踏み出すためのハンドブックづくりに関わった。発行は 2016 年度 6 月頃発刊予定。9/11、11/14、1/21 ハンドブック打合せ

(C) まけないぞうからの提言
足湯ボランティアと同じく東京大学被災地支援ネットワークと連携し、同ネットワーク開催の「復興グッズ被災地支援グッズ主宰者連携会議」に定期的に参加。同ネットワークが主催した“シンポジウム「〈災害時経済〉と市民社会～支援と自立をめざす市民事業をめざして～」”に増島・村井が参加。これまで追求してきた「災害時ボランティア経済圏」の概念形成に努めて来た。3/26 “シンポジウム「〈災害時経済〉と市民社会～支援と自立をめざす市民事業をめざして～」

(D) その他
2015 年度で第 11 回目となる東海地震に備えた「静岡県内外の災害ボランティアによる救援活動のための図上訓練」でのネットワークには引き続き関わってきた。県外メンバーとしてプログラム作成のためのワーキンググループ（WG）にも頼政代表が参加した。
・WG ミーティング 4/15、5/20、7/15、9/9、11/25、2/10（頼政）
・図上訓練（12/11～13）
・ネットワーク委員会 5/13、7/3、9/16（村井）

<関係団体・グループとのネットワーク>
・認定 NPO 法人しみん基金 KOBЕ/ 副理事長・震災がつなぐ全国ネットワーク / 団体会員・阪神・淡路大震災人と防災未来センター / 事業評価委員・日朝兵庫友好の会 / 常任委員・特定非営利活動法人レスキューストックヤード / 評議員・特定非営利活動法人 CODE 海外災害援助市民センター / 理事・日本災害復興学会 / 理事・内閣府防災ボランティア活動検討会 / メンバー・関西学院大学災害復興制度研究所 / 外部研究員・東海地震に備えた災害ボランティアネットワーク委員会・9 条の会ひょうご・神戸大学キャリアセンターボランティア支援室・社会福祉法人野花会 / 評議員・おおさか災害支援ネットワーク・たつの女性が担う地域防災塾・伝統文化木造技術文化遺産準備会・神戸大学非常勤講師 / 神戸学院大学非常勤講 / 福井大学非常勤講師 / 神戸松陰女子学院大学非常勤講師 / 日本防災士機構 / 講師

4. 広報事業
会員間の連携と協働の充実を図るとともに、被災地内外の関係団体、支援者への情報発信を行った。
・じゅりみち 4 回発行（各約 800 部）
・HP は新たなデザインへと刷新し、情報発信を行っている。
http://ngo-kyodo.org/
・FB などの SNS も利用しながら情報発信を行っている。
https://www.facebook.com/KOBЕ1.17NGO/

5. その他
(A) 脱原発 24 時間リーレーハンガーストライキ
2012 年度から継続して脱原発ハンガーストライキを「原発が停止するまでやり遂げる覚悟」を持って今日まで続けてきた。また、ハンストに参加してくださっている方同士の交流の場を設けた。7/1 ハンスト交流会

2016年度事業計画

■事業概要

1. 寺子屋事業

今年度の寺子屋事業は、基本方針に示した通りテーマを「もう一つの生き方、もう一つの働き方を考える」と設定した。次世代の若者たちと一緒に「もう一つの生き方・働き方を模索する」ということを寺子屋全体のテーマとして「なりわい」について議論をしていきたい。CODE 未来基金や阪神・淡路大震災から21年たった今、特に大学のボランティア機関とも連携をしつつ、様々なワークショップなども取り入れていきたい。

2. まけないぞう事業

まけないぞう事業は今年度も継続する。東日本大震災から5年経ったが、未だに多くの課題が山積みになっている。当センターでは、まけないぞう事業を通した東北支援をすくなくともあと5年は続けていきたいと考えている。まけないぞうが「生きがい」となっている作り手さんも多い。その原動力は何なのかを東北の作り手さんへのヒアリングを通して分析していく。また、その思いをしっかりと発信していく。このようなヒアリングも通して“まけないぞうがメッセージを売っている”ということを確認しつつ“ボランティア経済圏”の具現化に努めていく。

3. 災害救援事業

災害時には迅速に対応できるよう、これまでのつながりを生かしつつ、阪神・淡路大震災や東日本大震災の経験を災害が発生した地域の特徴に合わせて活用しながら活動を行う。常総市での支援活動は、今年度も継続し、市民が中心となりつくり出そうとしている復興計画への提案も行なっていく。将来予想される大災害（南海トラフ巨大地震など）を念頭に置き、事前に顔の見える関係づくりを進めていく。また、能登半島地震10年に向けてKOBE足湯隊とともに住民の声をまとめた冊子発行を目指す。海外での災害発生時にはCODE海外災害援助市民センターの事務局をサポートする。

4. 提言（アドボカシー）・ネットワーク事業

今年度は寺子屋事業を柱にしつつ、「もう一つの生き方・働き方」を若い世代と共に考えることで、もう一つの社会の実現に向けた提言を行う。さらに、東日本大震災のこれまでの活動の教訓を活かし、5年を過ぎた現地の今後に向けて提言を行う。また、昨年度に引き続き「阪神・淡路大震災から20年KOBE市民とNGOフォーラム」の宣言文及びアクションプランの具現化を持って提言とする。また、同様に足湯ボランティアの活動及びまけないぞう事業から見える課題及びボランティア経済圏の具現化について提言を行う。

5. 広報事業

昨年同様、機関紙やHP,FB等で広報活動を行っていく。

6. その他

(A) 脱原発リレーハンストを継続する。

(B) JICA 草の根支援事業実施

(C) 基本方針に合致すると思われることにおいても可能な限り取り組む。

■事業内容

1. 寺子屋事業

(A) もう一つの生き方・もう一つの働き方を考える

年6回程度の予定。

今年度は、神戸大学学生ボランティア支援室の「なりわいカフェ」とのコラボを模索する。

第1回：農業の仕事ってなんだろう（予定）

～時には“アホ”になってみよう～

尾澤良平（予定）

第2回：未来基金での活動について（予定）

～「覚悟」を持って生きよう～

上野智彦・今中麻里愛（予定・CODE）

第3回：台湾の寄付文化について（予定）

～日本の若者と台湾の若者の違い～

李フシン（予定・京都大学）

2. まけないぞう事業

(A) 東日本大震災支援の継続

現在、作り手さんは約50人。まけないぞうが被災者にどのような影響を与えているのか、被災者が制作を続ける理由など、作り手さんからじっくりとヒアリングを行い、ボランティア経済圏と担い手の関係についても考察する。

また東京大学被災地支援ネットワークの呼びかけでできた盛岡を中心としたネットワーク「復興グッズ被災地主宰者連携会議“コレカラ”」へ昨年同様に関わっていく。

(B) 広報・販促に関して

今年度は販売目標を1万5000個とし、広報活動に力を入れる。特にヒアリングで聞き取った作り手さんの想いをを発信することで、メッセージ性を高め販売促進につなげる。

【販売イベント】

20年イベントの企画を企てる。

(C) その他

・被災地ツアー

スタッフと同行するかたちで、数名単位で現場視察やボランティア活動を行う。呼びかけについては、ML、HP、Facebook などを通じて行う。被災地への関心を持ってもらうと同時に販促にもつなげていく。

(D) “まけないぞう” 支え合い募金

昨年度末から行っている“まけないぞう”支え合い募金については、引き続き呼びかけを行っていく。目標金額は全部合わせて200万円。

3. 災害救援事業

1) 国内災害に関する救援・復興・提言活動

(A) 熊本地震支援活動

これまで築いてきた震災がつなぐ全国ネットワークとの関係やその他のネットワーク、高野山真言宗総本山金剛峯寺社会人権局、公益財団法人Civic Force との関係などを活かしながら、災害発生時にはすばやく被災地へ入り、人間復興へつながることを意識しながら活動する。

(B) 復旧・復興支援事業

・東日本大震災支援の継続

まけないぞう事業を通して、引き続き神戸からのサポート体制を行っ

ていく。また、広島の方々とは協力し七回忌法要をサポートする。

・広島土砂災害支援の継続

2014年8月に発生した広島土砂災害へは、三回忌法要への参加などを通じ、つながりを継続していく。

・常総市豪雨水害支援の継続

昨年9月に発生した東北・関東豪雨水害の被災地である常総市への支援を継続する。現地のNPOである茨城NPOセンターコモンズ、関東・東北豪雨災害による障がい者避難実態調査連絡会などと連携し、復興寺子屋勉強会やまちづくりワークショップ等を通して、今後は市民がつくる復興計画づくりに協力していく。

・復興寺子屋

4月22日、23日@常総市

講師：松本誠（市民まちづくり研究所）

(C) 南海トラフ巨大地震に備えて

・静岡県内外の災害ボランティアによる救援活動のための図上訓練（3月開催予定）

静岡県で行われる災害ボランティアのための図上訓練に参加し、日頃のからの顔の見える関係を築いていく。

・たつの女性が担う地域防災塾との協力

昨年度に引き続き、たつの市での活動等に積極的に関わっていく。

たつの足湯隊の活動も必要に応じてサポートを行う。

・高知県、徳島県などとのネットワーク作り

2013年度につながった高知県黒潮町へのスタディーツアーをたつの女性が担う地域防災塾と連携し行う。また、2014年7月の台風被害の支援に入った徳島県や南海トラフ巨大地震で被災地となりうる可能性のある地域とのネットワーク作りを行う。

(D) その他

・KOBE 足湯隊のサポート

KOBE 足湯隊の事務局として引き続き活動をサポートしていく。今年度は震災がつなぐ全国ネットワーク及びレスキューストックヤードと連携し、能登半島地震から10年を迎える被災地の方々的心声を届ける冊子を作成するため、能登半島での活動を重点的に行う。（年2～3回の予定）

2) 海外災害に対する緊急援助活動とその後の復興へつなぐ支援活動

(A) CODE 海外災害援助市民センターとの連携

例年通り、海外での災害発生時にはCODE海外災害援助市民センターの事務局のサポートなどを行う。また、寺子屋事業で触れたように、CODE 未来基金とも連携する。

4. 提言（アドボカシー）・ネットワーク事業

(A) もう一つの生き方、もう一つの働き方についての模索

阪神・淡路大震災やその他の災害の教訓や課題を掘り起こしつつ、東日本大震災からの提言と、寺子屋事業を通して、「もう一つの生き方、もう一つの働き方」を模索し新しい社会に何が必要かを提言する。

(B) インターン受入れ

神戸学院大学／神戸松蔭女子学院大学

今中麻里愛（神戸学院大学）

<関係団体・グループとのネットワーク>

・認定NPO法人しみん基金KOBE/ 副理事長

・震災がつなぐ全国ネットワーク / 団体会員

・阪神・淡路大震災記念　人と防災未来センタ / 事業評価委員

・日朝兵庫友好の会 / 常任委員

・特定非営利活動法人レスキューストックヤード / 評議員

・特定非営利活動法人CODE 海外災害援助市民センター / 理事

・日本災害復興学会 / 理事

・東海地震に備えた災害ボランティアネットワーク委員会

・9条の会ひょうご

・神戸大学キャリアセンターボランティア支援部門アドバイザー委員会 / 委員

・社会福祉法人野花会 / 評議委員

・おおさか災害支援ネットワーク

・たつの女性が担う地域防災塾

・伝統木造技術文化遺産準備会

（その他）

神戸大学非常勤講師（村井） / 福井大学非常勤講師（村井） / 神戸松陰女子学院大学非常勤講師（村井） / 神戸女子大学非常勤講師（村井・頼政） / 日本防災士機構講師（村井）

5. 広報事業

(A) 通信「じりみち」の発行

ネット普及により紙媒体のニーズが減っているため、年3回の発行を予定

（6月 / 10月 / 3月）

(B) ネットニュースなどの活用

8bitNEWS など市民メディアを活用する。

8bitNEWS：http://8bitnews.org/?p=7381

(C) Facebook の利用

引き続き Facebook でも情報発信を行う

(D) メールニュースの配信

これまで通りメールニュースを配信する。

・災害救援ニュース

・ハンストニュース

・まけないぞうがつなぐ遠野物語

・まけないぞう購入者向けメールマガジン

まけないぞうを購入した方を対象に不定期のメールマガジンを発行することで、リピーターや会員を発掘する。

・その他関連ニュース

6. その他

(A) 脱原発リレーハンストの継続

2012年6月14日～引き続き原発がゼロになるまでリレーハンストを継続する。

(B) JICA 草の根支援事業（予定）

JICA 草の根支援事業を受託し、たつの女性が担う地域防災塾のメンバーとともに、インドネシアの防災について学び、現地の方々とも交流を行う予定だが、現在インドネシア政府の承認待ち。

(C) その他

基本方針に合致すると思われる活動は可能な限り取り組んでいく。

特集

熊本地震救援活動

今年4月に発生した熊本地震。当センターでは、この3ヶ月間、継続して支援活動を展開してまいりました。詳しい活動内容などは、HP (<http://blog.livedoor.jp/kyodocenter-kumamotojishin/>) をご覧ください。

熊本地震に関しまして、みなさまからの温かいご寄付をいただき、心から感謝申し上げます。西原村では、鈴木隆太（元スタッフ）、寺本わかば（神戸大学生）が当センター現地スタッフとして活動しています。

・支援の手が少ない西原村へ

地震発生後、益城町や熊本市内での支援活動を行いながら、被災地域の調査を行いました。その結果、益城町と南阿蘇村に挟まれた西原村に支援の手が少ないということがわかり、西原村で支援活動を展開することに決めました。

・西原村災害ボランティアセンターの新しい挑戦

西原村災害ボランティアセンターの運営のお手伝いにも入ったのですが、いかんせん人が足りないという状況でした。そこで、西原村ではサテライト方式での運営をしようということになりました。通常のボラセンとは異なり、村内3箇所に設置した拠点にボランティアを送り、各サテライトがボランティアと住民をつなぐ役割を果たしました。この方式によって、ボランティアと住民の距離感が短くなり、よりきめ細かな支援活動を展開することができました。

もう一つの新たな取り組みは、「農業復興ボランティアセンター」です。ボランティアセンター開設当初から「畑の手伝いをしてほしい」という要望が数多く出ていました。「地震で親戚なども被災し、本来できていた作業が遅れてしまっている」「家が被災しているが、農作業をしないと1年の収入がなくなってしまうので、片付けよりも優先したい」という声が寄せられていました。ところが、生業の支援となると通常の社会福祉協議会が運営するボランティアセンターでは手伝うことが難しいという状況が過去の被災地でもありました。

そこで、西原村では社協、農協、行政、農家、ボランティアが集まって会議を開き、「農業復興ボランティアセンター」という新しい組織を立ち上げ、農家のお手伝いをするようになりました。こうすることで、社協としても負担を軽減することができました。また、農業支援は災害支援の緊急期が終わった後にも必要になる可能性があります。こうした恒常的な支援につなげやすくするためにも、別の名前をつけて活動を行っていくことにしました。また、農業の支援を通じて西原村のファンになってもらい、長く西原村を支えてくださる存在になってもらいたい、というねらいも込められています。

・動き出す地元の住民たち

もう一つ、当センターで活動の重要なポイントとして考えていることは、地元の方々がどのように動き出すのかということです。西原村出身の神戸大学生で、1年間大学を休学して活動に打ち込んでいる寺本わかばちゃんを中心に

して、地元の方の「やりたいこと」を形にする”わかばmeeting”が動き出しました。地域の方々が自発的に動き出せる環境づくりを目指しています。地域の方々とボランティアをつなぐ場作りとしての「炊き出しマルシェ」。細かな情報を伝えるツールであるフリーペーパー「できるだけ週間 DOGYAN」の発行。小・中学生の勉強スペースづくりなど、様々な活動に取り組んでいます。

その他にも、地元出身の若者中心にした「NOROSHI 西原」や農業復興ボランティアセンターから活動内容を見直した「西原村百姓応援団」など、地元と密接につながり継続的な復興支援を行うグループがたくさんできています。

こうした地元で新しくできたグループや元々あるNPO、地元組織、そして外部から支援に入ってきている団体などをつなぎ、情報交換を行い課題を解決する場として「西原村 reborn プロジェクト」が始まりました。ゆるやかなネットワークとして、情報交換をしつつ、地域の課題を解決するためお互いの力を出し合う場として機能することを目指しています。まだまだ始まったばかりなので、試行錯誤をしつつですが、確実に地元の方々の力を集めて前に進みつつあります。

・今後の課題

西原村では仮設住宅の入居が始まりました。一人暮らしの方もたくさんいらっしゃいます。仮設住宅に入ってもまだ間もないので、隣の人ともお話ししていないという方もいらっしゃいます。こうした方々のコミュニティをどのように支援していくのか、今後の課題です。

まだ水が飲めない地域の方もいます。水をどう確保するのか、行政ともしっかりと話して行くことが必要です。

また、地域の方々を含めて、暮らし全体の再建を考えなければなりません。集団移転をするのか、地域で再生するのか、出て行く人はいるのか、残った人だけで地域を支えられるのか、様々な問題が出てきます。こうした問題の解決のためには、地域の方々を中心にした話し合いを重ねていくことが大切です。私たちはこのような地域の話し合いをサポートしていきたいと考えています。

まだまだ課題はたくさんあります。地域の人たちだけでは解決しきれない問題もあります。たくさんのボランティアが被災地に向かい、一人ひとりの被災者と向き合いつつ、ともに歩んでいくことが必要です。これからも当センター

では、被災地の方々と共に考え、共に歩んでいく、そんな支援活動を展開していきたいと思っています。（頼政良太）



第58号 2016.7.20

発行所：被災地NGO協働センター 〒652-0801 神戸市兵庫区中道通2-1-10
TEL:078-574-0701 FAX:078-574-0702 HP:<http://ngo-kyodo.org/>

「ごくろうさまです。11日を迎え5年が過ぎました。たくさんのご支援とたくさんの報道があります。テレビをみていて、やっと涙が出るようになりました。ふりかえられるようになってきたのだと思います。ご支援本当にありがとうございます。」(2016/3/8)と石巻の作り手さんがメッセージを寄せてくれました。

熊本地震で被災した人たちのためにと、「まけないぞう」の作り手さんがいち早くわかめを送ってくれました。痛みの共有です。熊本の被災地では「熊本には地震なんてこないと思っていた。まさか、自分がこんなことになるなんて。」「被災者という言葉に抵抗がある。まさか自分が被災者と呼ばれることになるなんて」と。同じ言葉をどれだけ被災地で耳にしたことでしょうか？阪神・淡路大震災から21年、防災や減災などに取り組んできたけれど、これだけ同じ言葉を聞くと、なんだか気持ちがもやもやとしてしまいます。

私たちの仲間も熊本で被災しました。その仲間は1999年に自転車に乗り、熊本から神戸までまけないぞうをPRしながら走って来てくれたのです。阪神・淡路大震災から10年の節目の時に彼らが書いてくれたメッセージの一文を紹介します。「一人の作り手の女性は、熊本からきた僕を見るなり、僕ではなく僕が熊本から自転車にぶら下げてきた『まけないぞう』に『わあ、よく帰ってきたなあ。こんなに汚れてしまって、はやくきれいにあらってもらわなあかんあ。』と我が子のように話し掛けられました。その時、僕は『まけないぞう』が作り手の方々にとって、とても大切な存在なのだと感じました。それから、彼女は僕に『良くてきてくれたね。たいへんだったでしょう。ありがとう。』と言ってくださり『まけないぞう』について話してくれました。彼女は『震災後、夜中に何度も目を覚ましてしまうけど、ぞうさんつくったとら、気がらくになんねん』と言われました。」というメッセージを寄せてくれました。

今回は私たちの活動の拠点でもある西原村で彼らの仲間も被災しました。彼らは自ら被災しながらも仲間たちと声



を掛け合い、西原村など被災地支援に奔走しています。また彼らの一人の仲間が働く知的障害者施設は今回の地震により、建物の半分が壊れてしまい、国や行政機関と協議し、全国からの仲間に協力を仰ぎながら

再建に向けて歩みを進めているそうです。

3ヶ月経ったいまもお、状況は極端には変わっていません。仮設への移行が進む中、公費解体を待つ被災家屋は手つかずのまま、あの時から時がとまっています。



そんな中でも熊本の西原村にまけないぞうをお届けしました。唐芋(さつまいも)農家のばあちゃんにプレゼント、とっても喜んでくれました。足湯をしているときにもぞうさんをプレゼントさせていただき、みなさんに笑顔を届けていました。

東日本の被災地ではいまだ仮設住宅の暮らしが続いています。この夏やっと自宅の建築に取り掛かれる目途がついた作り手さんがいます。この人は釜石市の根浜地区の人です。この地域は夏には海で海水浴を楽しめる根浜海岸がありました。岩手県はこの津波で防潮堤を14.5mという基準にしました。けれど、この地区は高台への避難を基本として、海がみえるということで防潮堤を震災前と同じ高さにしました。そして、造成団地と「第2堤防」とした市道の高さを20mかさ上げしました。岩手日報(2015/12/13)には「根浜振交会の佐々木雄治事務局長(59)は『災害にどう備えるか、地域の考えをまとめて行政に伝えてきた。宅地や家ができて万々歳ではなく、自分たちが将来の姿をイメージして地域をつくれるかが大事』と自負する。」と述べられています。こうして、住民が主体となりながらのまちづくりをしている地域もあります。これからどんな暮らしが待っているのか期待に胸が膨らみます。

また、陸前高田市に住む作り手さんは、造成した土地に新築を建てる予定にしています。5年経ってやっと自宅の



区画が決まりました。そして、家を建築できるのは今から3年後だそうです。「もう慣れたから、ずっとここ（仮設）にいるよ」とあきらめにも似た明るい声で話してくれます。結局、震災から8年間も仮設暮らしを余儀なくされるのです。以前にも紹介しましたが、その作り手さんは、これまでぞうさんを作って貯めたお金は一切手をつけていません。それでまけないぞうの手間賃をコツコツ貯め、30万円もお金を貯めたのです。いつか家を再建した時に記念になるものを買うと言っています。

また、別の人は復興住宅の建設を待っていました。「6月くらいに入れるかな」と心待ちにしていました。でもその建物は少し違和感があります。ほとんどの人が一戸建てに住んでいたにも



関わらず、高層マンションの住宅を用意されるのです。中には「ボタンを押して、上下に行ったり来たりするのは慣れない」という人もいます。「お庭も畑もできないから、退屈だ」という声も聞きます。

一人の作り手さんから「全く縁のない米崎町に新築入居して6ヶ月目。3月に入るとあの震災の報道や生まれた里

が恋しくて気が沈んでいた。『持って来たよ！リングぞう50ヶ分。テレビ報道で注文が殺到。作る気になってからでいいから』と。作り始めたら『私、あの子の所へ行くの』『ぼくは外国旅行』『にこにこマークの所へ行くよ』なんか1ヶ完成するたびにそう言われているみたい。気持ちもホッとします。私も少しは役にたつのか？となぐさめられ、見知らぬ買って下さる方へ『ありがとう』と伝えてね。1年以上建築のため休み、また一針一針縫い始めました。よろしくをお願いします。」とメッセージをくれました。「自分も人のお役に立てるのね」と、まけないぞうを通して、生きがいややりがいを感じています。



Makenaizone の応援団より

東日本大震災から5年と3ヶ月、熊本・大分地震から約2か月が経ちました。紫陽花の美しい季節を二度と迎えることなく天に召された方々と今もなお不自由な環境での避難生活を続けていらっしゃる多くの皆さまのために祈ります。今日という日を生きたかった多くの方々の想いに心を寄せて、キャンドルライトを灯し 東北の被災者の方が一針一針心を込めて作られたまけないぞうさんと共に黙祷。

■事務局ボランティアも募集しています！

私たちと一緒に活動して下さるボランティアさんを随時募集しています！

初心者の方も全く問題ありません。ボランティアでの活動を通して、NGOや市民社会、防災・減災のことも学ぶことが出来ます。やる気のある方大歓迎です。ぜひお越しください。

■編集後記

熊本地震の発生から約3ヶ月が経ちました。被災地ではまだまだ大変な思いをしておられる方がたくさんいらっしゃいます。当センターでも継続的に支援活動を行っています。

さて、以前から呼びかけをさせていただいていたクラウドファンディングですが、皆様のおかげで成立をいたしました。たくさんのご支援ありがとうございました。「まけないぞう号」も心機一転し、活躍中です。これで安心して、東北までの道のりも安全に走行でき、みなさんの想いを被災者のみなさんにお届けすることができます。

どうぞこれからも「まけないぞう」をよろしく願います。(頼政良太)

当センターの姉妹団体「CODE 海外災害援助市民センター」の活動にもご協力よろしくお願ひします。

昨年4月に発生したネパール地震の支援活動を開始しています。皆様ご協力よろしくお願ひします。詳しくはHP等をご覧ください。HP:<http://code-jp.org/>

■入会・カンパのお願い

被災地 NGO 協働センターでは、会員を随時募集しています。普段なかなか活動にご参加できない方でも賛助会員等で活動に間接的にご参加いただくことが出来ます。ぜひよろしくお願ひします！活動カンパ、事務局カンパも随時受け付けています。下記の振込先によりお願ひ致します。

- ★団体会員 年会費 ¥ 10,000 × 1口以上
 - ★個人会員 年会費 ¥ 3,000 × 1口以上
 - ☆団体賛助会員 年会費 ¥ 10,000 × 1口以上
 - ☆個人賛助会員 年会費 ¥ 3,000 × 1口以上
 - ☆自由選択会員 年会費 ¥ 任意の額
- 郵便振替 加入者名：被災地 NGO 協働センター
口座番号：01180-6-68556